

郭沫若先生の詩碑について

彷彿但丁来
奇名驚地獄
一浴宵増暖
白雲千載意

血池水在閑
勝境擅蓬莱
三巡春満懐
黄鶴爲低回

眼前に、かのダンテが徘徊(来たるかのごとし。血の池はたぎりたち、地獄という奇なる名に驚きはすれど、こここそまさに仙境、蓬莱(日本)随一の景観なり。一たび湯浴みせば、宵は暖かさを増し、三たび巡れば春はふとこころにて満てり。白雲は、いにしえより変わらず悠々とたなびき、黄鶴は心地よきに飛び立ちかねて低きを回れり。

● 建立の由来

この詩碑に刻まれているのは、郭沫若先生が昭和三十(1955)年に別府温泉を訪れた際に詠んだ自筆の詩です。

郭沫若先生は、地獄めぐりの後、別府に投宿し、心ゆくまで別府の味と温泉を堪能しました。地獄の凄愴な光景と湯のぬくもりは、よほど心に残ったのでしょう。後日、別府でのおもてなしのお礼にと、この自作の詩を関係者に贈りました。

郭沫若先生(1892~1978)は、中国の政治家、文学者で、歴史学者としても世界的に著名な業績があります。また、戦前は、九州大学に留学し、その後、中日友好協会会長として両国の友好親善に大きな足跡を残しました。

別府市は、昭和五十三(1978)年、別府市日中友好協会のご協力のもと、各界の日中友好人士や団体・企業などから、詩碑建立の浄財を集め、翌五十四年に除幕式を執り行いました。

この詩碑により、世界に誇るわが別府温泉が日中両国の懸け橋となり、永い友好に寄与できますよう願っております。